資料紹介

大正天皇 石間駐蹕記念碑建設実記

林　寅喜
（会員　佐伯市中の島）

はじめに

日露戦争が終わって六年後の明治四十四年（一九一一）十月、豊後水道を中心とした海域において日本海軍の大演習が挙行された。

当時皇太子であった嘉仁殿下（後の大正天皇）はお召艦富士に乗艦されて親しく御見学なされ、同月二十二・二十三の両日艦隊は佐伯湾に入港して停泊し、二十三日には殿下自ら石間浦の尾根に登陟（とうちょく）せられ、全艦艇五十五隻の雄姿を高所から聘望（ていぼう）なされ、翌二十四日御帰還になった。

この実記は当時佐伯町助役（後に大入島村長）であった松本谷次郎が書き残していたもので、去る日の日曜文化講座の席上拝借することが出来た。そこで早速コピーして解読を試みた。原文はB四判にして十二枚と半分である。以下順を追ってその内容を説明したい。

原文の概要

一大演習のあと艦隊は佐伯湾に停泊するという通告を受けた当時の郡長河越萬三郎は、急ぎ町村長を招集してこの旨を伝え奉迎の協議をした。その結果

・大入島村石間浦の東側山壁に、白木綿数十反を縫い合わせて「奉迎」の二字を書いた垂れ幕を準備した。

・献上品として

椎茸とホダ木　干海鼠（ほしなまこ）

生鯛　柿

鳥賊（いか）　甘藷

伊勢海老（いせえび）　菊花諸種　を用意した。

一二十二日から二十三日にかけて佐伯湾に停泊した艦艇は、戦艦・巡洋艦外が二十一隻、駆逐艦三十隻その他四隻の五十五隻であった。（別表参照）

一二十三日奉迎の準備が終了したので、各部担当者は葛港及び石間浦に出張した。

・佐伯町助役松本谷次郎は打ち上げ花火の担当者として係員三人と、人夫三人を伴って石間浦の尾根に登り、八時十分から打ち上げを開始した。
・九時ごろ中将旗を揚げたバッテーラ（ランチ・短艇）が、お召艦富士を離れて陸に向かうのが見えた。乗員は十二人で白浜（大入島小学校とトオドウ鼻の間）に上陸すると、尾根に通ずる坂道を登り始めた。
・松本助役は急ぎ途中まで下りてお迎えした。
・先導は加藤友三郎海軍中将（呉鎮守府長官）そして殿下、その後に羽田野敬直東宮太夫と続いていた。殿下は助役のすぐ側を御歩行になった。
・尾根では住民たちを畑に座らせ、東宮太夫に名刺を差し出し最敬礼をした。殿下はお手を挙げて答えられた。
・尾根には約二十分間お立ちになって全艦を眺望（ちょうぼう）された。
・御帰途は押して回り道をなされ、その途中荒網代小学校児童職員とお出会いになり奉迎をお受けになった。
・道幅は狭くかつ険しいため、東宮官が手を添えられた所もあった。
・浜辺では漁師が網の手入れをしていたすぐ側を御歩行になったので、慌てた漁師を助役が制止した。
・御帰艦のバッテーラに御乗艇の際は、陸に向かって腰をお掛けになっていた。

この日大演習の御見学を佐伯湾行啓と仰せ出された。

・同日佐伯町・大入島村・南郡役所へ酒肴料が下賜された。
・また、日没後午後七時から佐伯湾近傍の高山や海辺で、一斉に篝火を焚き、海上には数十艘の小舟を出してこれでも篝火を焚いて歓迎の意を表し、十時過ぎまで続いた。

一二十四日は午前七時より各艦一斉に錨を揚げて出港した。お召艦富士の出港は八時三十分であった。

一二年後の大正二年九月になって、駐蹕（ちゅうひつ）を記念して碑を建設しようとする動議が起り、町長小田部隣を会長に選んで建設委員会を発足させた。

・碑は銅製で高さ一・五（メートル）幅六〇（センチ）の剣光型とし、製作は大阪市東区高麗橋通り五丁目の駒井嘉兵衛が請負い、基礎は一辺が二・八（メートル）深さ一・二（メートル）のコンクリート基礎とし、碑台には花崗岩を使い高さ三（メートル）、上幅一・五（メートル）中幅一・八（メートル）下幅二・一（メートル）の立方体、外部には鉄柵を設けて台と鉄柵は佐伯町の高浦衡平が施行した。
・建設費用は郡内の有志に寄付を仰いだほか、郡長田島

七郎は郡費の拠出について郡会に諮り同意を得た。
・碑文は郡立佐伯中学校々長秦政治郎が謹撰し、書は第四師団長大迫尚道中将の筆なる。
・除幕式は三年十月二十三日現地で挙行され、知事黒金泰義をはじめ郡長岩松繁夫ほか多数出席して盛大に行われた。

あとがき

記録によれば殿下が石間浦の尾根（標高六七メートル）に登陟されるという事前通告はなかったようである。ところが、二十三日早朝の打ち上げ花火をお召艦富士から見ていたであろう（勿論人影も多かった筈）東宮官が、あの尾根に登陟なされば全艦艇の雄姿を騁望されると考えてこの旨殿下に言上したものか、或いは殿下の御意思によったものかは知るよしもないが、尾根にいた助役等一行と見学していた住民が、中将旗を揚げた十二人乗りのランチが白浜に着岸後、坂道に差し掛かるのを見てはじめて殿下が登陟されることを知り、急ぎ助役が途中まで下りてお迎えしたこと、また、荒網代小学校の児童と職員が現地に向かう途中でお出会いになり、海辺では漁師が殿下御歩行のことを知らされて驚愕したなどから推測すると、行啓の予定はなかったと考える。もしあったとすれば山道の保全やお立ち台準備などのほか、郡長以下現地でお迎した筈であるがその辺の記録は何もない。

艦艇の停泊位置考察

実記には艦艇の停泊した位置順に艦名を書いているが、肝心の方位が分らないので全艦艇の位置付けをする決め手はない。しかし、艦隊は記録通りに北から東向きに並列して停泊したものとし、その海域は概ね片白・竹ケ島・流れバエ・八島を結ぶ内湾と考えて、明治三十六年陸地測量部発行の五万分の一図により東西に配列して見たが思わしくなかった。一方、自衛隊佐伯分遣隊の資料室にある写真を見ると、（荒網代浦からの撮影と思うが明瞭でない）艦の向きは南北となっており実記とは違う。しかし、これは十月下旬の風向から考察するとこの方が実態に合っていると思う。そこで方向のみ変えて配列したのが別図である。これ以後佐伯湾に於ける艦隊の停泊は幾度かあったが、一度に五十五隻もの停泊は最初にして最後ではなかったろうか。

停泊戦艦・巡洋艦一覧表

但し、装備関係は除く
☆印＝日本海々戦参加艦艇

停泊位置	艦名	艦種	排水屯	速力	進水年	造船所
第一戦列	☆対馬	三等巡洋艦	3,366	20.	明治37	呉工廠
〃	☆千早	通報艦	1,238	21.	〃37	横須賀工廠
〃	☆笠置	二等巡洋艦	4,900	22.5	〃31	米国
第二戦列	☆出雲	一等巡洋艦	9,733	20.75	〃33	英国
〃	☆常盤	〃	9,700	21.5	〃32	〃
〃	☆浅間	〃	9,700	21.5	〃32	〃
〃	☆磐手（いわて）	〃	9,733	20.75	〃34	〃
〃	☆八雲	〃	9,695	20.	〃33	独国
〃	☆吾妻（あづま）	〃	9,326	20.	〃32	仏国
第三戦列	薩摩	一等戦艦	19,372	18.25	〃42	横須賀工廠
〃	鹿島	〃	16,400	18.5	〃39	英国
〃	☆朝日	〃	15,200	18.	〃34	〃
〃	☆春日	一等巡洋艦	7,700	20.	〃36	伊国
〃	☆日進	〃	7,700	20.4	〃36	〃
〃	石見	一等戦艦	13,516	18.	(1904)	拿捕艦
〃	周防（すおう）	〃	12,970	18.6	(1901)	〃
御召艦	☆富士	〃	12,533	18.25	明治30	英国
第四戦列	満州	通報艦	3,916	17.6	(1904)	拿捕艦
〃	☆明石	三等巡洋艦	2,755	19.5	明治32	横須賀工廠
〃	☆千代田	〃	2,439	19.	〃24	英国
〃	☆秋津州（あきつしま）	〃	3,159	19.	〃24	〃

註　戦列は原文に従って北側から順に、湾外に向かって停泊したものと想定した。
なお、秋津州は原文では秋津となっている。

停泊駆逐艦一覧表

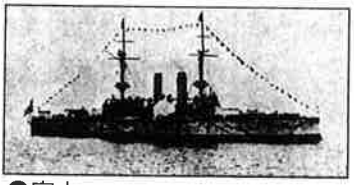
☆印＝日本海々戦参加艦艇

艦名	排水屯	速力	進水年	造船所	摘用
☆夕霧	247	30.	明治32	英国	原文には夕ぐれと記載
疾風（はやて）	381	29.	〃 40	大阪鉄工桜島工場	就航は日露戦没後
朝露	381	29.	〃 39	〃	〃
おづて（ママ）					不祥
時雨（しぐれ）	381	29.	〃 39	川崎造船所	就航は日露戦没後
初雪	381	29.	〃 39	横須賀工廠	〃
夕暮	381	29.	〃 39	佐世保工廠	〃
白露	381	29.	〃 39	三菱長崎造船所	〃
夕立	381	29.	〃 39	佐世保工廠	〃
☆叢雲（むらくも）	247	30.	〃 32	英国	
☆不知火（しらぬい）	247	30.	〃 32	〃	
三日月	381	29.	〃 39	佐世保工廠	就航は日露戦没後
☆陽炎（かげろう）	247	30.	〃 32	英国	
菊月			〃 40	浦賀船渠	就航は日露戦没後
水無月（みなづき）			〃 40	三菱長崎造船所	〃
長月			〃 40	浦賀船渠	〃
卯月（うづき）	381	29.	〃 40	川崎造船所	〃
初春	381	29.	〃 40	〃	〃
春風	381	29.	〃 39	〃	〃
いはちか					不祥
☆村雨	375	29.	〃 36	横須賀工廠	
☆朝霧	375	29.	〃 36	〃	
☆白雲	341	31.	〃 35	英国	
かのひ					不祥
☆霞	363	31.	〃 35	英国	

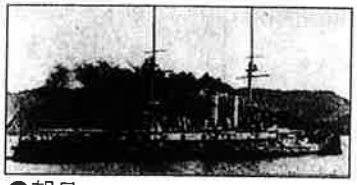
艦　　名	排水屯	速力	進水年	造船所	摘　　用
潮（うしお）	381	29.	明治38	呉工廠	就航は日露戦没後
☆朝潮	341	31.	〃 35	英国	
☆春雨	375	29.	〃 36	横須賀工廠	
松風	381	29.	〃 40	三菱長崎造船所	
野分（のわき）	381	29.	〃 39	佐世保工廠	
☆豊橋	4,060	12.	〃 30		水雷母艦

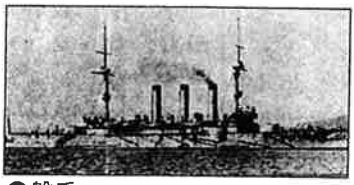
参考図書　歴史群像日露戦争　ＫＫ学習研究社　・日本海軍史(7)海軍歴史保存会
日本海軍全艦艇史　ＫＫベストセラーズ　・海軍(9)誠文書館　ほか

●浅間

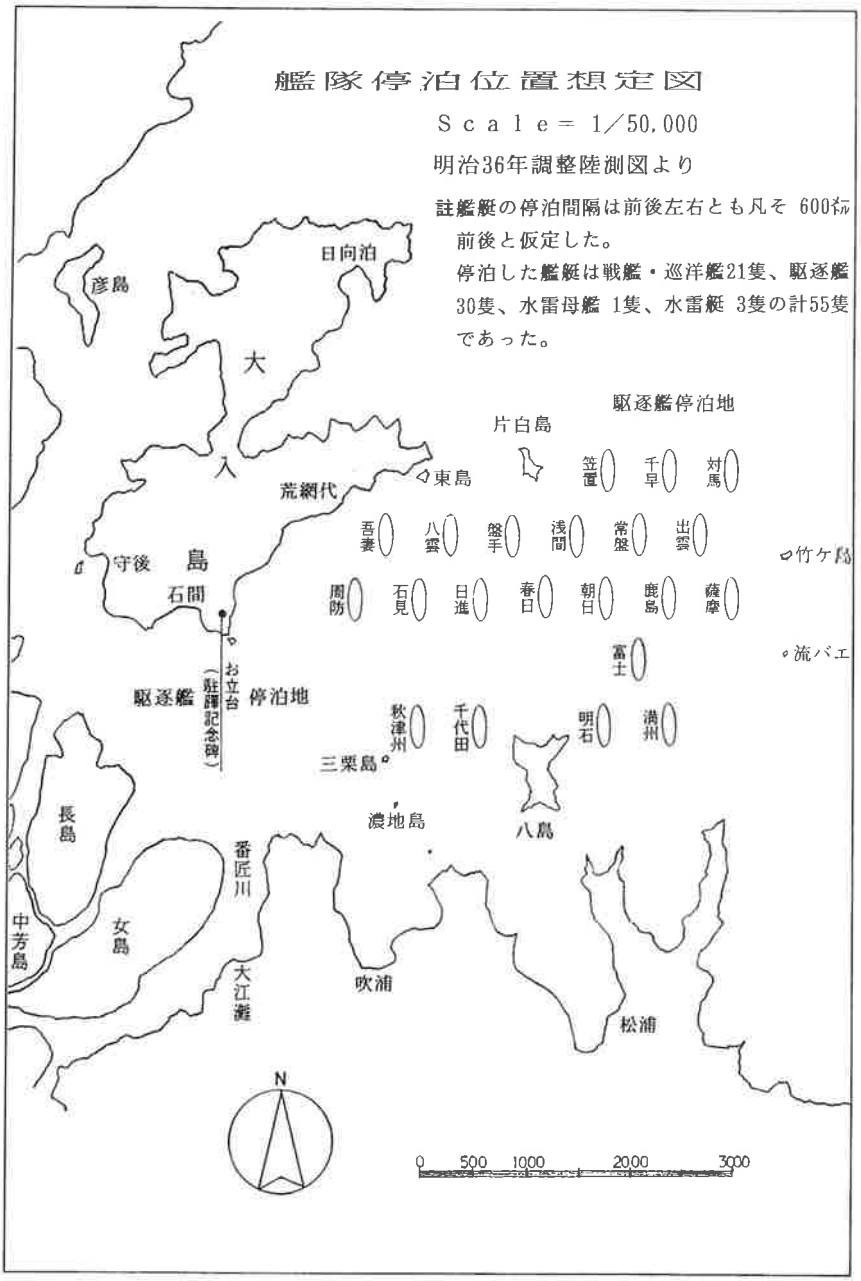

●富士

●吾妻


●朝日


●磐手

駐蹕記念碑


艦隊停泊位置想定図
Scale= 1/50,000
明治36年調整陸測図より
註艦艇の停泊間隔は前後左右とも凡そ 600㍍前後と仮定した。
停泊した艦艇は戦艦・巡洋艦21隻、駆逐艦30隻、水雷母艦 1隻、水雷艇 3隻の計55隻であった。
駆逐艦停泊地
片白島
笠置
千早
対馬
吾妻
八雲
盤手
浅間
常盤
出雲
周防
石見
日進
春日
朝日
鹿島
薩摩
富士
秋津州
千代田
明石
満州
東島
荒網代
竹ケ島
流バエ
日向泊
彦島
大
入
島
守後
石間
お立台
(駐蹕記念碑)
駆逐艦
停泊地
三栗島
濃地島
八島
長島
番匠川
中芳島
女島
大江瀬
吹浦
松浦
N
0
500
1000
2000
3000